

# 千刈狸の呟き

## ～ 月月火水木金金 ～

謹賀新年！ 新年早々、纏まりのない老い耄れ狸の昔バナシで誠に恐縮だが、その昔、「(海の男だ艦隊勤務) 月月火水木金金」こんな軍歌が流行ったことがある。明治生まれは殆ど消え、大正生まれや昭和一桁生まれも残り僅かになった今、記憶にある狸諸候は少ないのだろうが、御国(ミクニと読みます)を守る帝国海軍軍人の無休の勤務振りを唄ったものであり、政府作製の「欲しがりません、勝つまでは……」などと同様、戦時中の、今で言えば“新語”“流行語”というところであろうか。

少年時代その帝国海軍に身を置かれ、御国に捧げるはずの私の身命もどうやら果てずに戦争は終わったのだが、外科医として世の中に出た途端から再びこの「月月火水木金金」の七文字に縛られることになる。自由だ民主だ(政党のバナシではありません)と様々な当時の新語が交差する世の中になってからもである。施術患者の状態が落ちてから白衣を脱ぐから帰宅は殆ど午前様になる。日曜・祭日は自分の入院患者を見回ってから家族との行動を決める。未だ抗生物質などの不確かな頃の医療のことで感染症が主流をなした時代、急性腹症などで内科医からのお召しが多く、それに未だ「ケガはゲカ(怪我は外科)」の世代で、特に深夜の出勤が多かった。従って、朝飯抜きでそのまま外来診療というのが日常茶飯事ということになる。特に、暴飲暴食の多い盆・正月は酷く、手術の無い大晦日と元旦を経験したことが無いと言い切れるほどだ。これは、外科医ばかり、或は、勤務医だから、というだけではなく、それぞれカチや内容は変わるのだが、内科系医も開業医もいずれ「月月火水木金金」の自由時間の無いショウバイだったのである。

面白いことに、不自由時代に於ける艦隊勤務(私自身は飛行兵)でも、戦時手当・危険手当・特攻隊手当などなどで(復員時には)給料の3倍以上も戴いて帰ったが、自由主義時代とやらになり医師の仕事をしてからは休日手当・時間外手当などなど貰ったことがないのだ。そんな給料に五月蠅さかった労働組合幹部さんたちでも「お医者さんは大変な仕事ですなー」の一言だけで毎夜の

酒飲み仕事に明け暮れるばかりであった。

数十年前から「無医村」という新語が生まれ、この頃では「医師不足」という新語(?)をよく耳にする。この新語が出現する前には「盪回し」などという言葉が医療用語として通用するようになっていたが、同時に「診療拒否」という新語も生まれ、耳にタコが出来るほど報道屋さん達は多用して、われわれ医者たちの心を痛め続けていたものである。

永田町の狐集団に崩壊の兆しが見え始めた頃、その大親分は「医者が多いと医療費が嵩む」という将に落語的発想で日本医療の縮小を試みた上、「聖域なき痛み」なるものを弱者に強要したが、拳句は、(桶屋は儲からずに)医師不足・盪回しの類の新語発生となって、またまた、社会における「医者=悪者 極悪集団」の図式は強化されたのである。

医師不足・盪回しを題材にして報道屋さんたちはマイクを民衆に向ける。勿論、どーする? が目的なのだろうが、お母さんがたは「お医者さんには気の毒ですが、ワルいときは診て戴かないとねー」(お医者さんにはその義務がありますよねー)となる。酷いものになると、「医者は儲けているのだからショーネーだろう」と。

政権交代(これも新語だそうです)したニュー政治屋さんは、「小児科や産婦人科のような医師不足の科の診療費は揚げませんとねー」と小さい声で呟いていたが、財源不足が云々される今では「どーする」の声すら聞こえない。産婦人科・小児科やその他、治療結果に対する訴訟問題もその一因になっていることなどはもう既に忘れ去られたようだ。

テレビのスクリーンの向こうで、次から次と運ばれてくる救急患者相手に走り回り、漸く寸時を得た暁、井一椀の机の下の長椅子で仮眠をとっている若いドクター達の姿を見る度に自分の過ぎ去った昔を思い出す。今になって考えるのだが、忙しいトキこそよく勉強が出来たような気がする。

頑張れ! 負けるな! 風邪引くな!

(禿 狸)